
不思議出来事ノート

瑠宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議出来事ノート

【Nコード】

N6318U

【作者名】

瑠宇

【あらすじ】

忘れてしまう出来事を、

忘れないよう粘ってみたいんだよ。

『天才』にもプライドがあるんでね。

表紙裏（前書き）

これは私が学校帰りにぱっと思いついたものです。

超不定期連載ですので……。

表紙裏

こんな言葉から始めるのはどうかと思うが、私は天才だ。

ただ、頭がいいという訳ではなく記憶力がいいのだ。

どれくらい記憶力がいいのかというと、友人と話した内容を一字一句間違えずに再現することができる。
話した1ヶ月後なんて余裕だ。簡単すぎる。

しかし最近ある変なことが起きた。

いつもの私ならしっかりと覚えているのだろうが、なぜだかその出来事を私はぼんやりとしか覚えていない。

その出来事が起こったあと1週間前の朝食のメニューをしっかり覚えていたため、記憶力が下がったという訳ではないようだ。

ちなみに、朝食のメニューはその日の前の夕飯の残りのクリームシチュー（ジャガイモが無かったため入っていなかった。）と冷蔵庫の中にあつた唐揚げ（冷凍物で、その5日前に近所の業務スーパーで購入した。）をチンし、適当にその辺の野菜を使ってサラダ（レタスと紫玉ねぎとトマトをそれぞれ切ってフレンチドレッシングをかけた。）を作り白ご飯を茶碗に山のように盛った。

…話がずれたな。

とりあえず私はその出来事を1冊のノートに箇条書きをしてみた。

そうした後、1つ1つの単語を眺めていると頭の中に映像が流れた。

よくよく考えるとその映像がその変なことで起きたことだったのだ。

しかし、その映像も今ではすっかり薄れてしまっている。

もう1度単語を眺めても、もう映像が流れることはなかった。

それがこのノートを作り始めたきっかけになったのだ。

変なことが起こる。

私はそれを忘れてしまったため、単語や箇条書きで書き留める。

見直してそれを映像化（ここでは思い出すことをこう表現する）する。

その映像は少しは記憶に留まるのでそれをノートに書く。

完全に忘れてしまってもこういうことがあった。と見直せる。

の繰り返しをしようと思う。

一般人はそうして記憶を呼び覚ますのだろうか？

『日記』というものだ。

私には今まで必要がなかったが、こういった変なことを忘れてしま
うのは悔しいからな。

…悪いか？

天才にもプライドがあるんだよ。

まあ、とりあえずこれから毎日という訳ではないが書き留めておく
と思う。

以上だ。

もしこのノートと、

私が忘れてしまったなら。

それはもう、

私は天才ではなくなったということだろう。

雨の日

私だ。

先日、例のことが起こった。

あれだよ、変なことと私が呼んでいる記憶に残らない現象だ。

まず覚えていることを書いてみようと思う。

2 雨 少女 傘 長靴 虹 無言 笑顔 子供

そして、『もう出会えない。』

こんなものだ。…少ない……な。

じっくり見ているとやはり映像が駆け巡る。

・
・
・
・
・
・
・
・

うむ、記憶した。

今からそれを書きとめていく。

梅雨の中休みなのか、今日は晴れ。

私は学校から帰る途中。

そんな誰もが暑いと言っている中、1人の少女の姿が目に入る。

9歳ぐらいだろうか、小さな背丈だ。

少女の格好は雨でも降っているような格好で、傘を2本持ち長靴を履いている。えらくご機嫌なようだ。

見ているこっちが暑くなる、というのが本音だ。

だが、その少女のことを見るものは周りを見てもいない。

普通こっつうのは変な目で見る者が多いと思うのだが…。

そんな時、ポタリ 何かが落ちてくる。

上を見ると今まででは考えられないような分厚く黒い雨雲。

どんどんと雨が降り始める。

勘弁して欲しい。傘なんて持ってないんだよ。

周りにいた人々は走って屋根のあるところへと急ぐ。

当然さっきの少女は傘を差すと思い目をやるが、何故だか差さない。

しかも機嫌はどんどん上がっている。

少女はきよきよと周りを見渡す。

そこで私と目が合った。

少女はじつとこっちを見てくる。私もそんな少女からなぜか目が離せなかった。

少女がにこっと笑い手招きをする。

何かあるのかと私は少女の方へと行く。

私が目の前に来たのを見て少女は傘を開いた。しかも2本とも。

貸してくれるのか？ と問えば少女は首を横に振る。

見ててね。 と少女の目が訴えている気がした。

少女は白地にピンクの水玉の傘と青地に黄色の傘を片手ずつに持ち、くるん と綺麗に回して見せた。

片方の傘を投げ回ったのちキャッチしたり、傘を再び閉じてそのまま2本を少し間を空けて空中に投げその閉じた傘が空中で同時に開くというものをしたり。

まるでショーを見ているようだった。

少女は終始笑みを絶やさなかった。

そんな少女が2本の傘を閉じ、私に向かってぺこり とお辞儀をした。

どうやら終わったのだろう、私は少女に拍手をした。

少女は心の底からだと思われる笑顔を私にした。

キラリ 何かが光る。

雨粒か？ そう思って空を見上げると、

さつきからは考えられない青空。

太陽。

そして七色に光る虹。

少女に伝えようと少女のほうを見ると、そこにはもう姿は無かった。

雨の日の少女。

何も話さないが目で話す少女。

何かが私の心で言う、『もう会えない。』

少女は誰なんだ？

…以上だ。

日記とはこういう風に書くものでいいのか？

こういうのも新鮮でいいな。

次にこれを描くのはまた私が『変なこと』に出会ったときだ。

それまで、もし何か私と同じような出来事があったときは

君も書いてみたらどうだ？

雨の日（後書き）

これは雨が降っていたときに思いついたものです。

こんな少女に会ってみたいなー
w w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6318u/>

不思議出来事ノート

2011年10月8日12時54分発行